

* 契沖曰く、「詩人八酒ヲ愛シ、歌人八色ヲ愛ス。コレ和漢ノ大体歟」（徒然草鉄槌第三段への書入・全集十六）。

* 「ひんのぬすみ こひのうた」（毛吹草）。

『萬葉集』卷十六・三八八

住吉の小詰めに出でて現にも己妻すらを鏡と見つも

『古事記』下・允恭天皇 軽太子の歌

隠り国の、泊瀬の河の、上つ瀬に、斎杵を打ち、下つ瀬に、真杵を打ち、斎杵には、鏡を

懸け、真杵には、真玉を懸け、真玉如す、吾が思ふ妹、鏡如す、吾が思ふ妻、ありと言はばこそ、家にも行かめ、国をも思はめ、

『萬葉集』

・卷二・一九六

……鏡なす 見れども飽かず 望月の いやめづらしみ……

・卷四・五七二

まそ鏡見飽かぬ君に後れてや朝夕にさびつつ居らむ

『莊子』（応帝王）

至人の心を用ゐることや鏡の若し、将らず迎へず、応へて蔵めず、故に物に勝へて傷られず。

『萬葉集』卷十二・二九七八 「寄物陳思」

まそ鏡見ませ我が背子わが形見持てらむ時に逢はざらめやも

（真十鏡 見座吾背子 吾形見 将持辰尔 将不相哉）

『肥前国風土記』松浦郡

鏡の渡。昔者、松隈の廬入野の宮に御宇しめしし武少廣國押楯の天皇のみ世、大伴の

狭手彦の連を遣りて、任那の國を鎮め、兼、百濟の國を救はしめたまひき。命を奉りて、

到り來て、此の村に至り、即ち、篠原の村の弟日姫子を媁ひて、婚を成しき。容貌美麗

しく、特に人間に絶れたり。分別るる日、鏡を取りて婦に與りき。婦、悲しみ滞きつつ粟川

を渡るに、與られし鏡の緒絶えて川に沈みき。因りて鏡の渡と名づく。

後漢・秦嘉重報妻書（芸文類聚・閨情）

……こゝろ間「この鏡を得る。既に明且あつ好し。形は文彩をみ観る、世に希まれに有る所なり。意こゝろ甚なほだこれを愛す。故に以て相ひ与ふ。

「ちかごろわたしは此の鏡を得た。明るくていいし、形といひ模様といひ世間よにめつたにないものだ。わたしがひどくすきなものだから之をおまへにやる」（鈴木虎雄『玉台新詠』上・岩波文庫）。

『遊仙窟』

下官又曲琴を遣はし、揚州の青銅鏡を取らしめ、十娘に留与し、并せて詩を贈りて曰く…

「わたしは、さらに、曲琴をやつて揚州の青銅鏡を取つてこさせ、それを形見として十娘にのこし、あわせて詩を贈つた」（今村与志雄『遊仙窟』岩波文庫）

白居易の詩二首

「感鏡」

美人與我別 美人我と別る

留鏡在匣中 鏡を留めて匣中に在り

自從花顔去 花顔の去りてより

秋水無芙蓉 秋水芙蓉無し

……
「以鏡贈別」

人言似明月 人は言ふ明月に似たりと

我道勝明月 我は道いふ明月ま月に勝れりと

……

我慚貌醜老 我は慚はづ貌醜老にして

繞鬢斑斑雪 鬢めくを繞れる斑斑たる雪

不如贈少年 如かず少年に贈りて

回照青絲髮 青糸の髪を回照せんに

因君千里去 君に因りて千里去れ

持此將為別 これを持つて將に別れを為さんとす

漢代の鏡銘

・見日之光、長毋相忘（日の光を見て、長く相ひ忘るること毋かれ）

・願君毋相忘（願はくは君相ひ忘るること毋かれ）

・願長相思、久毋見忘（願はくは長く相ひ思ひて、久しく忘らるること毋かれ）

・常貴、樂未央、毋相忘（常に貴く、楽しみ未だ央つきず、相ひ忘るること毋かれ）

青銅器の銘

- ・其子々孫々永宝（其れ子々孫々永く宝とせよ）
- ・其自今日孫々子々毋敢望白休（それ今日より孫々子々敢て伯休を忘るること毋かれ）
- ・子々孫々永宝用、勿遂（子々孫々永く宝用せよ、墜すこと勿かれ）

・武文咸刺永_レ毋忘（武文咸な烈、永葉忘るること毋かれ）

精白鏡の銘

……煥玄錫之流澤、恐疎遠而日忘（玄錫の流沢に煥かにして、疎遠にして日びに忘るることを恐る）……

閨怨詩を思わせる鏡銘

・久不見、侍前稀、秋風起、予志悲（久しく見ず、前に侍ること稀なり、秋風起こり、予が志悲しむ）

・君有行、妾有憂、行有日、反無期、願君強飯、多勉之、仰天太息、長相思（君行くこと有り、妾憂ひ有り。行くこと日有り、反ること期無し。願はくは君強ひて飯し、多く勉めよ。天を仰ぎて太息し、長く相ひ思はん。）

『萬葉集』二九七八とその注釈二種

まそ鏡見ませ我が背子我が形見持てらむ時に逢はざらめやも

武田祐吉『萬葉集全註釈』

形見である鏡を所持せむ時にの意。手に取りて見る時のことではないだろう。

『新編日本古典文学全集』

持てらむ時に 持テラムは、持ち続けている意の持テリに推量の助動詞ムが付いた形。…ム時ニは仮定条件のバに同じ。あなたがこれを持っている限りいつかは逢えるという気持。

『臥雲日件録』（瑞溪周鳳）文安四年（一四四七）二月二十日条

……城呂（座頭ナリ）頗能和歌、問_レ之、歌人例有_二富士之烟之語_一、来由如何、呂曰、昔天智天皇ノ代、富士山下市、常有_二老人来売_レ竹、人怪_レ之、一日行尋_二其飯処_一、富士山中一村翁、家有_二処女太艶美_一、翁曰、女初於_二鷺巢中_一得_二一小卵_一、卵化為_二此女_一、撫養日久、我毎々売_レ竹、以為_二家資_一、故世名_レ我為_二竹採翁_一云々、此事聞_二于朝廷_一、勅求_二此女_一、遂納為_二帝妃_一、名曰_二加久耶妃_一、妃一日白_二帝曰_一、妾以_レ有_二夙縁_一、来侍_二左右_一、今当_レ歸_二天上_一、

因出_二不死薬_一、天葉衣、及粧鏡、奉_レ之曰、若見_レ思_レ妾、則可見_二此鏡_一、鏡中必有_二妾容_一（若

し妾を思はるれば、則ちこの鏡を見るべし。鏡中必ず妾が容有らん）、言畢不見、後帝

披_二天葉衣_一飛去、到_二富士山頂_一、於_レ此燒_二不死薬与_レ鏡_一、其烟徹_レ天、凡歌人所用、本_二於此_一也、富士亦曰_二不死_一、蓋由_レ此也

離別の歌の中の鏡

・『後撰和歌集』離別

下野にまかりける女に、鏡に添へてつかはしける よみ人しらず
ふたご山ともに越えねどます鏡そこなる影をたぐへてぞやる

・『後撰和歌集』離別

遠き国にまかりける人に、旅の具つかはしける、鏡の箱のつらに書きつけてつかはしける
おほくほののりよし

身をわくる事のかたさにます鏡影ばかりをぞ君にそへつる

・『続古今和歌集』離別

ものへまかりける人のもとへ鏡つかはすとてよみ侍りける

惠慶法師

(拾遺集初出)

別かるれど影をば添へつます鏡としつき経とも思ひわするな

『源氏物語』須磨巻

(光源氏が)御鬢かきたまふとて、鏡台に寄りたまへるに、面瘦せたまへる影の、われながらいとあてにきよらなれば、「こよなうこそ衰へにけれ。この影のやうにや瘦せてはべる。あはれなるわざかな」とのたまへば、女君(紫の上)、涙ひと目浮けて見おこせたまへる、いと忍びがたし。

身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡の影は離れじ

と聞こえたまへば……

福永光司 報告中で「コージ」と読み誤りました

「八角古墳と八稜鏡」(『道教と日本文化』)

鏡が弥生時代以降に大陸から日本に持ち込まれてきたものであることは疑問の余地がありません。……ですから、伊勢神宮をはじめ日本の神社の多くが鏡をご神体に行っているという事実は、中国古代の宗教思想の影響を受けたものだとして断定して誤りないと思います。

『古事記』上

(天照大御神は皇孫邇邇尊に天降りして蘆原中国を治めよと詔りして)八尺の勾瓊鏡、また草那芸劍、また常世思金神、天石門別神を副へ賜ひて、詔りたまひしく、これの鏡は、専ら我が御魂として、吾が前を拝くが如いつきまつれ。次に思金神は、前の事を取り持ちて、政為よ」とのりたまひき。

祝詞「出雲の国の造の神賀詞」

己命の和魂を八咫の鏡に取り託けて、倭の大物主くしみかたまの命と名を称へて、

大御和の神なびに坐せ。